

2022年9月25日 説教「嘆きの祈り」

列王記第二4章 18～28節

今回はシュネムの地に住む裕福で信仰深い女性がエリシャのために、屋上の間を働きの拠点として提供したことをみました。その結果、彼女の必要が備えられていきました。彼女は遠慮気味でしたが、預言者エリシャは神からのメッセージを女に伝えました。その言葉通り、彼女には男の子が与えられました。

### 1. シュネムの女の試練 (18～20節)

①父のところに (18)「その子が、大きくなって、ある日、刈り入れ人といっしょにいる父のところに出て行ったとき、」さて、その男の子は順調に成長していったのです。ある日の午前中のことです。収穫のために、刈り入れの人たちと一緒にいる、お父さんの所に、出かけていったのです。手伝おうと思ったのでしょうか。男の子ですから、お父さんの仕事に興味があったのでしょうか。その様子を見に行きたかったのだと思います。

②少年の病 (19)「父親に、『私の頭が、頭が』と言ったので、父親は若者に、『この子を母親のところに抱いて行ってくれ』と命じた。」ところが、仕事場所に行ってそれほど時間がたたない間に、その子は体調をくずしたのです。お父さんに「僕の頭、頭が」と訴えたのです。相当に痛かったのでしょうか。あるいは言葉には表せないような不快感を覚えたのでしょうか。「頭が・・・」というだけでした。年が進んでいる父親です。また、今日のように病院が近くにはありません。母親に託した方が良く考えたのでしょうか。若者に「この子の母のところに抱いていってくれないか」と頼みました。

③少年の死 (20)「若者はその子を抱いて、母親のところに連れて行った。この子は昼まで母親のひざの上に休んでいたが、ついに死んだ。」若者に抱かれた男の子。おそらくは、家までの道も相当に苦しんでいたことしょう。あるいはぐったりしていたかもしれせん。ともかくも、男の子は母親のところまで連れてこられました。母親は息子の状態に動転したでしょうが、できるだけの手当てをし、昼までは自らの膝の上で励まし、休ませていましたが、状況は好転せず、ついに命を終えたのです。

### 2. エリシャの所に向かう女 (21～23節)

①夫への依頼 (21～22)「彼女は屋上に上がって行って、神の人の寝台にその子を寝かし、戸を閉めて出て来た。彼女は夫に呼びかけて言った。『どうぞ、若者のひとりと、雌ろば一頭を私によこしてください。私は急いで、神の人のところに行って、すぐに戻って来ますから。』」母親は不思議な行動をとります。息子が死んだ後、屋上に行き、預言者エリシャがいつも使う部屋にその子を寝かせました。その上で、夫にお願いします。「若者ひとりと、雌ろば一頭をよこし



てください。」何をするのかというと、エリシャの所に行くということです。「すぐに戻ってきます」と言っていますが、とても急いでいる様子です。

②夫の疑問 (23)「すると彼は、『どうして、きょう、あの人のところに行くのか。新月祭でもなく、安息日でもないのに。』』と言ったが、彼女は、『それでも、構いません。』と答えた。」すると、夫は息子が死んだのも知らないのか、事態を飲み込んでいません。「いったいどうしたというのだ。今どうして預言者の所に行くというのだ。新月祭（月の初日に心新たに主の前に出る）、安息日（土曜日の礼拝日）でもないのに。」でも妻は「それでも構いません。行きます。」と主張します。

③手綱を緩めず (24)「彼女は雌ろばに鞍を置き、若者に命じた。『手綱を引いて、進んで行きなさい。私が命じなければ、手綱をゆるめてはいけません。』』ともかく彼女は急いでいます。雌ろばに鞍を置き、一刻も早く出発しようとしています。そして、若者にも、手綱を引いて出発しなさい。手綱を緩めれば、ろばは止まってしまうので、ともかく手綱を引き続けなさいと命じたのでした。

### 3. 真つすぐにエリシャのもとに (25~28 節)

①カルメル山 (25~26)「こうして、彼女は出かけ、カルメル山の神の人のところへ行った。神の人は、遠くから彼女を見つけると、若い者ゲハジに言った。『ご覧。あのシュネムの女があそこに来ていた。さあ、走って行き、彼女を迎え、『あなたは無事です。あなたの主人は無事です。お子さんは無事です。』』と言いなさい。それで彼女は答えた。『無事です。』』彼女は真つすぐにエリシャのいるカルメル山に向かいました。シュネムからカルメル山までは約 50 キロです。一日はかかったでしょう。彼女がエリシャのいる所に近づくと、預言者の方でも、遠くからろばに乗ってやってくる人を認めました。それも女性です。ゲハジに言いました。「あのシュネムの女だ。迎えなさい。そして、「あなたや、主人、息子は無事か」とたずねなさいと命じたのです。ゲハジは言われた通りに尋ねると、彼女は事実とは異なって答えます。「無事です」。

②エリシャにすがりつき (27)「それから、彼女は山の上の神の人のところに来て、彼の足にすがりついた。ゲハジが彼女を追い払おうと近寄ると、神の人は言った。『そのままにしておきなさい。彼女の心に悩みがあるのだから。主はそれを私に隠され、まだ、私に知らせておられないのだ。』』彼女はともかくエリシャに会って直接に言わねばならなかったのです。山の上にいるエリシャの所によくたどり着くと、その足にすがりつきます。従者ゲハジは、女の突然の行動をいさめて、追い払おうと近づきました。しかし、エリシャは言ったのです。「そのまま良いのです。なぜなら、彼女には悩

みがあるからです。主もそれを隠しておられる。彼女を通して、それが知らされなければならぬのだ。』」。

③エリシャを責める女 (28)「彼女は言った。『私があなたさまに子どもを求めたでしょうか。この私にそんな気休めを言わないでくださいと申し上げたではありませんか。』』その通りでした。彼女は感情をこめて、吐きだします。「エリシャ様。私があなたに子どもを求めましたか。あの時、私は、気休めは言わないようにと言ったではありませんか。エリシャはそれで息子に何かあったという事態を察知したと思われま

《結論》先週はシュネムの女の信仰をみました。彼女の献身的で感謝に溢れ

た信仰をみました。また、思いを越える備えで男の子が与えられました。

息子の成長には喜ばされていたことでしょう。ところが、ここに思ってもみな

い事が起きたのです。息子が突然の病で命を落としてしまうのです。人生最

大といっても良い試練でした。

新約聖書の中でも、子どもの命がとられるという記事がいくつかあります。

たとえば、会堂管理者ヤイロの娘が命を落としたという記事があります (マ

ルコ 5 章)。旧約聖書のなかでは、ヨブは子どもたちを、事故や災害で失い

ました (1 章)。一方アブラハムの場合は、ようやくにして与えられた子イサク

をささげよと主に言われるということがありました (創世記 22)。

シュネムの女の場合、思うところがあって、子どもが命を落とした直後に、

カルメル山にいる預言者エリシャの所に向かいます。従者一人と共に、ロ

バに乗って、50 キロもの道を進んだのです。彼女は着くなり、エリシャの足

許にすがりつきます。エリシャの従者ゲハジは追い払おうとしましたが、エリ

シャは彼女の悩みが深いことを読み取り、彼女から話を聞きました。実をい

うと、主はまだこのことをエリシャに伝えておられなかったのです。女は従者

が問いかけた時には、息子のことは何も言いませんでした。まずは、預言者  
エリシャに直接、心の中にあるまを吐き出そうと思ったのです。彼女が訴え  
かけとは、あの子が与えられ際には、自分から求めたのではなく、むしろ気  
休めを言わないでくださいと言ったぐらいなのだと訴えています。ここでは  
死のことを言っていない。彼女は、言いたかったのです。そのようにして、与  
えてくださったのに、どうして守ってくだなかつたのですか。助けてください！

私は苦しいのです！ と。

上の例では会堂管理者にはイエス様が関わってくださっています。ヨブの  
場合は、友人達と、人生、信仰、生死などについて、論争しています。アブラ  
ハムはアドナイ・イルエ（主の山に備えあり）を学ばされました。

今日の信仰者にも、試練や困難が立ちはだかることがあります。そのよう  
な時に、シュネムの女の行動は学びの一つとなります。つまり、彼女は人間  
にではなく、神にその嘆きをぶつけようとしたことです。神の人エリシャの所  
に行ったのは、神に祈りたかったからです。私たちも、人間に向かう前に、神  
に向かって叫ぶことに意味があります。詩篇にはたくさんの、嘆きの祈りがあ  
ります。詩篇 13:2 には「私の心には、一日中、悲しみがあります。いつま  
で敵が私の上に、勝ち誇るのでしょうか」と祈っています。嘆きの祈りは不信仰  
ではありません。嘆きの祈りを通して、恵みの主に出会うこともしばしばです。  
讚美歌 399 「悩む者よ、とく立ちて、恵みの座にきたれや」とありますが、主  
の前に思いのたけを申し上げていきましょう。そこに主が臨んでくださるの  
です。そして、私たちの理解を越えた大いなることを、示して

くださるのです。

嘆きがあるのなら、そのまま主の前に出て、お伝えして良いのです。「どうし

てなのですか」と問うても良いのです。そのようなことを通して、主は導きを示し、語りかけてくださるのです。

コメント [kn1]: